

二人の法王の存在：協調か対立か

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

二人の法王

2013年2月11日、前法王ベネディクト16世は法王を辞職する意向を示した。そして翌月13日、アルゼンチン人のベルゴリオ（現フランチェスコ）が後継者として選出された。前法王は、ヴァチカンの聖ペトロ教会の裏にある元修道院の建物で生活することになった。その場所は現法王の住まいから、わずか500メートルしか離れていない。前法王は現法王に対して、一切口出ししないこと、つまり院政をしないことを宣言した。

現法王フランチェスコは庶民的な性格で、水曜日の一般謁見、日曜日の正午の講話を通して、一般市民の心を掴み、信頼度を高めてきた。その一方で、ヴァチカン内の勢力を二つに割ってしまった趣がある。法王はヴァチカンで大改革しようと動いているが、その前に立ちはだかっているのが、改革反対派の勢力である。すなわち、守旧派の存在だ。

昨年（2019年）のシノド会議では、ブラジルの「アマゾン地域の教会」が取り上げられた。アマゾンの密林地帯の中にも教会はいくつかあるが、それを預かって指導する司祭がいなくなってきた。カトリックでは聖職者になるという人そのものが減少傾向にある。しかし、教えは世界に広まっているのだ。世界には非常に不便なところもある。アマゾンでは司祭になる人がおらず、そのために現法王は臨時的処置として、既婚者を司祭として登用したのだ。カトリックでは、聖職者は結婚できない。このことが、守旧派からの総攻撃を受けるような形になったのである。

また2020年1月、前法王は、枢機卿でギニア人のロベルト・サラールと共著の形で『我々の心の奥底から』という本を刊行する予定だった。そのフランス語版は、一足先に発売が開始された。その直前に、ヴァチカン上層部はその本の発行を知り、前法王側に中止を求めていた。これを受けて、前法王も自分の名前と写真を取り下げることにした。しかしそれは間に合わなかった。

前法王には、次のような思いがあった。法王辞任当時、自分は余命いくばくもないと思っていたが、思いのほか長生きしてしまい、カトリックの現状の動きを見て自分の意見を発信してもおかしくないと考えたのだ。そこへ、サラール枢機卿が本を刊行するというので、相談に乗り、知恵も貸し、持論もその中に入れてもらった。サラール枢機卿と前法王との仲立ち、交渉役をしたのは前法王の秘書官であり、現在も前法王の身の回りの世話にあたっているドイツ人大司教のゲオルグ・ゲンスヴァインであった。

本の出版が近づいた時に、前法王の関与が明るみになり、現法王フランチェスコ側から次のような批判が寄せられた。法王というのは聖ペトロの後継者である。法王の言動を導くのは聖霊である。そこで、前法王は発行される本から、自らの名前と写真を削除することを決めたのだ。ともあれ、今後の教会運営において、このことが大きなしこりを残したのは事実である。

これら一連の出来事の後、前法王とサラール枢機卿の間を取り持った大司教ゲンスヴァインはヴァチカンの諸役から退いた。

大司教は本年（2020年）に入ってから、公衆の面前には現れていない。法王フランチェスコはこの大司教を左遷したのではないかと見られている。

雨乞い

地球温暖化による異常気象はイタリアにも大きな影響を与えている。昨年12月から本年2月にかけて降雨量が著しく減った。特に顕著なのがシチリア島だ。昨年は北部で雨が少なく、イタリア最長の川であるポー川の水量が非常に少なかった。昨年は春によく雨が降ったので、昨夏の水不足は起きなかったが、本年はシチリアを中心に雨が少なく、イタリア各地の土地でひび割れを起こしている。イタリアで一番高い山、火山であるシチリア島のエトナ山は海拔3,323メートルあるが、今年は雪もない。これから春から夏にかけて、恵みの雨を頼むばかりになっている。シチリア島での今冬の平均気温は、今までの平均気温と比べると1.65度上昇している。雨は昨年の12月から本年2月にかけて、非常に少なく、例年のわずか3パーセントしか降っていない。イタリア半島最南端のバシリカータのダムの水位はこの30年で最低となった。サルデニア島では冬にもかかわらず、気温は27度を記録したこともある。気温が高いために、あちこちで自然火災が発生している。

シチリア全島では、雨乞いのための祈りの行進が続いている。庶民だけの行進では望みは叶わず、今では教会にも頼んでいる。2月23日の日曜日には、ニッセーノという町の教会には600余人が集って、雨を願う祈禱を行い、その後皆で唱和しながら街を練り歩いた。そこへ隣町からの信者たちも寄り集って十字架を掲げて行進した。彼らは、農業の守護聖者アントニオ・アバーテの像も持ち出してまで練り歩いていた。カリーニという町のアゴニザンティ教会、パレルモ県のシベッリーナ、ポッジョレアーレでも、パドヴァの守護神であり雨の守護神でもある聖者アントニオの名前を呼びながら行進が行われた。

法王ピオ12世の書類公開

法王ピオ12世は1876年にローマで生まれ、本名はエウジェニオ・パチェッリという。1930年から前法王ピオ11世の筆頭秘書を務めていた。そして、ピオ11世の死去とともに、1939年3月2日に法王に選出され、ピオ12世と名乗った。時はイタリアのファシズム、ドイツのナチズムの時代であった。同年9月には、第2次世界大戦が勃発した。

しかしながら、ピオ12世には法王としての立場からの戦争についての発言、ムッソリーニやヒトラーに関する発言はほとんど無かった。また、「ショアー」と呼ばれるアウシュビッツへのユダヤ人収容にも沈黙していた。そのために、1958年の彼の死後、今日に至るまでさまざまな批判がなされている。そのピオ12世がしたためた手紙、書類、メモや記録類が、彼がローマ法王に選ばれた日を記念して、法王選出後81年の今年3月2日に一般公開された。収集された1,600万枚の書類、15,000以上の封筒、1939年から1958年にかけての2,500あまりの冊子などがあり、それらを整理して、一般公開するのに13年かかった。もしかしたら、これにより、ピオ12世に関して新しい事実が出てくるかもしれない。